

会報 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 「えご」と安曇族 丸山祐之
- 2~3 歴史は変わる！(6) 池田義光
- 4 市原合戦は松本だった 倉科武久
- 5 魅惑の犀宮社(明科) 古川幸男
- 6~7 安曇氏族のその後 金井 恂
- 8 編集後記 松尾 宏

発行責任者 安曇誕生の系譜を探る会 会長 丸山祐之
 編集委員長代行 松尾 宏 事務局長 川崎克之
 〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3 ☎090-5779-5058



写真 小松宏彰

「えご」と安曇族

会長 丸山祐之

会の発足後まもない頃、阿(安)曇族をテーマにしたシンポジウムが福岡市東区志賀島で開催され、会からも数名参加しました。その際に「えご」(いごともいう)の話をしたところ、会場が一瞬ざわめきました。「私ども信州の山奥の安曇野では”えご”という海産物を食べる習慣があり、それはここ福岡の皆さんが食べておられる”おきゅうと”と同じ原料の海藻エゴ草から作られたものです。」

「そうか、そうした同じ食文化が遠く離れた長野の安曇野にあるのなら、古代において安曇族が北九州から移り住んだことの有力な手掛かりではないか」と意を強くされた方々が少なからず居たようです。当時私も何らかの関連があるのではと考え発言してしまいました。しかしながら現在までのところ、以下のように考えるようになりました。

安曇野まで糸魚川方面から運ばれ、盛んに食べられるようになったが、その南限は穂高辺りまでで、そこ以南や松本地域では食さなかった。その理由は、ただ単に穂高で売り切れてしまい、以南には届かなかったためではないだろうか。市豊科郷土博物館の倉石あつ子先生によると、穂高神社境内前を「売り切り線」と呼ぶそうです。そのため北部安曇野地域までしか食べる習慣が無く、安曇族との関

付けをする説が唱えられているのではと思います。

現在新潟県では、この伝統食の越後えご保存会があり、そのメンバーの一人である新潟県立博物館の大楽和正主任研究員に伺ったところ、1680年頃の上越高田の文献に「いご」の事が載っているが、延喜式などには情報はないし、未だ詳しい事は不明とのこと。また越後固有のものなのか、博多から鳥取県の倉吉、丹後の宮津等を経由して、越後に伝わったかも知れないし、博多の「おきゅうと」と佐渡の「いごねり」の食べ方が似ているとのことでした。また飯山市でも売り切れ線のようなものがあるとのこと。今後の調査研究に期待するところです。

一説では、江戸時代の享保年間(1716~35年)に博多で初めて作られ、北前船や漁船の往来で能登半島経由で越後に伝わったとあります。そうであれば、何か新しい史料でも見つかるまでは千年以上前の古代氏族の移動とこの食文化の継承を関連付けることは難しそうです。単に海へのあこがれの食が、17~18世紀に北部安曇野地域に根付いたと言うことかも知れません。信濃安曇族へのアプローチは他のルートを模索し続けることとなります。

歴史は変わる！(その6)

池田義光

かつて私たちが知っていた歴史的出来事や考察が、新しい史料や遺物などの発見や研究の進展によって変わり、それによって教科書が書き換えられるということは多々ある。

今回は近世史の中から「教科書が書き換えられた事例」をいくつか紹介する。

1 「天下布武」の意味

【従来の説】 1560年桶狭間の戦いで今川義元を倒した織田信長は、その後も敵対勢力を次々と倒し、1567年に美濃を攻略した頃には「天下布武」の印判を用いて全国統一を目指した。

【現在の説】 最近の研究では、当時の「天下」意味は、日本全国ではなく「畿内」を指していたと言う説が出てきた。当時は畿内周辺を治めるものが日本のまとめ役だという意識を持っていたと言う。1567年には信長はまだ

尾張・美濃の2カ国を支配したに過ぎないので、「天下布武」の意味も、武力を持って畿内を制圧する程度の意味であったと考える。後に畿内を制圧した後の信長は「全国統一」をめざすように変わったかもしれないが。



【高校教科書： 山川出版の『詳説 日本史B』】

『信長は1560(永禄3)年に今川義元を桶狭間の戦いで破り、1567(永禄10)年に美濃の斎藤氏を滅ぼして岐阜城に移ると、「天下布武」の印判を使用して上洛の意思を明らかにした(脚注:当時の「天下」には、全国という意味のほか、畿内を指す用法もあった。信長が用いた「天下」を後者の意とみる説もある)。』

* 脚注で畿内説を紹介

【中学教科書： 東京書籍の『新編新しい社会 歴史』】

織田信長の説明として『「天下布武」をかかげ、武力による全国統一を目指しました。』 ○池「天下布武」を「全国統一」と説明

【中学教科書： 教育出版の『中学社会 歴史』】

資料として「天下布武」の印を載せ、『信長が文書に押すようになった印章で、天下を武力で統一しようという意思が表れています。』と説明

* 「天下」が「日本全国」なのか「畿内」なのかは述べず

2 長篠の戦いはどこまで変わったか？

【従来の説】 1575年の長篠の戦いでは、織田・徳川連合軍は、①3000丁の鉄砲を用いた。②三段撃ち戦法を用



いた。③武田の騎馬部隊に勝利した。

【現在の説】 ①鉄砲3000丁説に疑問が出され1000丁説も出されているが、いずれにしても大量の鉄砲を使用した。②三段撃ちはしていないという説が有力。③武田軍が騎馬部隊かどうか疑問が出されているが、騎馬中心の部隊であったことは間違いないとされている。また当時の馬はドラマや映画などで使われる背の高いサラブレッド系の馬ではなく、背の低い木曾馬などの在来馬だったが、それでも戦闘では活躍できた。

【高校教科書： 山川出版の『詳説 日本史B』】

本文で『1575(天正3)年の三河の長篠合戦では、鉄砲を大量に用いた戦法で、騎馬隊を中心とする強敵武田勝頼の軍に大勝し、』 絵図資料として『鉄砲隊の活躍(「長篠合戦図屏風」)長篠合戦において、織田・徳川連合軍は鉄砲隊の威力で武田の騎馬部隊を破った。』

* ①「鉄砲の数」に触れず、「鉄砲を大量に用いた」
②「三段撃ち」とは言わないが「鉄砲を大量に用いた戦法」
③「騎馬隊を中心とする強敵武田勝頼の軍」、「武田の騎馬部隊を破った」

【中学教科書： 東京書籍の『新編新しい社会 歴史』】

本文で『信長は、鉄砲を有効に使った戦い方により、甲斐(山梨県)の大名武田勝頼を長篠の戦い(愛知県)で破り、』 絵図資料として『長篠の戦い(長篠合戦図屏風)織田信長は、鉄砲のほか、木で組んだ柵や堀を利用して、戦いを有利に進めました。』

* ①②「鉄砲の数」と「三段撃ち」に触れず、「鉄砲を有効に使った戦い方により」「鉄砲のほか、木で組んだ柵や堀を利用して、戦いを有利に進めました。」
③武田の「騎馬部隊」に触れず。

【中学教科書： 教育出版の『中学社会 歴史』】

本文では『信長は、長篠(愛知県)の戦いでは、鉄砲を活用した戦法で、有力な大名だった甲斐(山梨県)の武田氏を破りました。』 『長篠の戦い(長篠合戦図屏風)織田信長と徳川家康の連合軍(左側)が、武田勝頼の軍(右側)と戦っています。』

* ①②「鉄砲の数」と「三段撃ち」に触れず、「鉄砲を活用した戦法で」
③武田の「騎馬部隊」に触れず。

3 関ヶ原の戦いほどまで変わったか？

【従来の説】 石田三成方の西軍(豊臣方)と徳川家康方の東軍(徳川方)の戦い

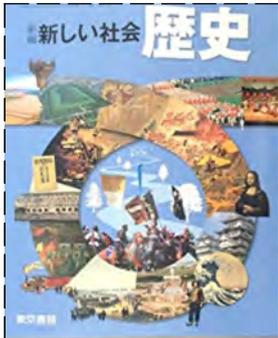
【現在の説】 (1)盟主：西軍の盟主は名目上は毛利輝元で、石田三成ではない (2)豊臣方対徳川方ではない：両軍に豊臣恩顧の大名がおり、両軍とも豊臣秀頼のために戦うという名目があった。

【高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】 『五奉行の一人で豊臣政権を存続させようとする石田三成と家康の対立が表面化し、1600(慶長5)年、三成は五大老の一人毛利輝元を盟主として兵をあげた(西軍)。対するのは家康と彼に従う福島正則・黒田長政らの諸大名(東軍)で、両者は関ヶ原で衝突した。』



* ①西軍の盟主は毛利輝元
②「豊臣政権を存続させようとする石田三成」対家康

【中学教科書：東京書籍『新編新しい社会 歴史』】 『1600年、秀吉の子豊臣秀頼の政権を守ろうとした石田三成は、毛利輝元などの大名に呼びかけ、家康に対して兵を挙げました。家康も三成に反発する大名を味方に付け、全国の大名は、それぞれ三成と家康を中心とする西軍と東軍に分かれて戦いました(関ヶ原の戦い)』



* ①盟主は毛利輝元か石田三成か不明 ②「豊臣秀頼の政権を守ろうとした石田三成」対家康

【中学教科書：教育出版『中学社会 歴史』】 『豊臣秀吉の死後、関東を領地としていた徳川家康が勢力を強め、政治を動かすようになりました。1600年には、豊臣氏の政権を守ろうと挙兵した石田三成らを、関ヶ原の戦いで破り、豊臣方についた大名の領地を没収しました。』

* ①盟主は石田三成のように読める？ ②「豊臣氏の政権を守ろうと挙兵した石田三成ら」「豊臣方についた大名の領地を没収しました」

4 江戸時代に「鎖国」をしていなかった

【従来の説】 江戸幕府は、1616年にヨーロッパ船の寄港地を平戸と長崎に制限したことを皮切りに 鎖国(国を鎖す)政策をはじめた。その結果、三代将軍徳川家光の時代の1641年に平戸のオランダ商館を長崎の出島に移し、日本人との自由な交流を禁じることで鎖国が完成した。

【現在の説】

(1)「鎖国」という言葉の使用：江戸時代初めの外交政策では「鎖国」という言葉はなく、「鎖国」という言

葉が使われたのは19世紀のことで、欧米船の接近によって危機意識が高まった時に「鎖国」が幕府の祖法であると主張することで外国との交渉を回避しようとした。

(2)江戸時代の外交実態：国を鎖す(鎖国)というより、幕府の統制下ではあるが、4つの口を通じて対外的な交流があった＝長崎口を通じてオランダ・中国と、対馬口を通じて朝鮮と、薩摩(琉球)口を通じて中国と、松前口を通じてアイヌと、交流があった。

【高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】 本文の《鎖国政策》の項で『～こうしていわゆる鎖国の状態となり、以後200年余りのあいだ、オランダ商館・中国の民間商船や朝鮮国・琉球王国・アイヌ民族以外との交渉をとどすことになった。』脚注で、『ドイツ人医師ケンペルはその著書『日本誌』で、日本は長崎を通してオランダとのみ交渉を持ち、閉ざされた状態であることを指摘した。1801年に『日本誌』を和訳した元オランダ通詞志筑忠雄は、これを「鎖国」と訳した。鎖国という語は、以後、今日まで用いられることになった。』

* (1)脚注で「鎖国」という言葉が使用されるようになったいきさつを説明。(2)「いわゆる鎖国の状態」と記述するが、《長崎貿易》《朝鮮と琉球・蝦夷地》の項で、4つの口(4つの窓口)を説明。

【現在の中学教科書：東京書籍『新編新しい社会 歴史』】

『この幕府による禁教、貿易統制、外交独占の体制を鎖国と呼んでいます。鎖国は後には「祖法(先祖伝来の法律)」とされるようになりました。』脚注：『これまで関係している国以外とは国交を開いたり通商をしない体制を「鎖国」と呼ぶようになったのは、19世紀初めのことです。』『1804年、長崎に来たロシアの使節レザノフに対し、幕府は、国交のある朝鮮、琉球や、貿易をしているオランダ、中国以外の国とは関係を持たないのが国の決まりだとして、これを断りました。』

* 別の[鎖国下の対外政策]の《中国とオランダ》《朝鮮と琉球王国》の項で「4つの口(窓口)」を説明している。

【現在の中学教科書：教育出版『中学社会 歴史』】

『このように、日本人の海外への行き来が禁止され、外国との貿易が制限された状態は、後に「鎖国」と呼ばれました。』

* この後『[開かれた窓・江戸時代の国際関係]の《中国・オランダと長崎》《朝鮮と対馬藩》《琉球王国と薩摩藩》《アイヌ民族と松前藩》の項で「4つの口(窓口)」を説明。

* 赤字は筆者による注

会 員 募 集 中

年会費2000円(入会金無料) 会報年2回発行
歴史サロン及び勉強会に無料で参加できます。
お問い合わせ 事務局:川崎 090-5779-5058

市原合戦は松本だった 倉科武久

私は浅間温泉近くで生まれ育ちました、子供のころは夕方になると手ぬぐい一本ぶら下げて遊び仲間や家族と通い、春には悪仲間と茶臼山のいちご園を覗き、夏は蛍を追いながら畑の葱をむしって蛍籠にしたりしました。冬は湯上りの帰り道に濡れ手ぬぐいを振り回し、氷らせて遊ぶなど思い出多い温泉町です。

本年8月、地元本郷の歴史研究会で浅間温泉の史跡・旧跡の見学会があり子供のころには気づく事のなかった景色を新たに見ることが出来ました。

浅間の第1号源泉の上に薬師堂がありここは古くから湯が湧き出ており浅間御殿もここから引湯したとあります、万治2年(1659)水野氏が浅間御殿を改修した時、暘谷社(ようこくしゃ)を祀って湯薬師と名づけたと表示されています。この場所は小高いところですので西の方角を皆さんに見てもらい古代の安曇郡に繋がる重要道路ではなかったかとお話しました。

御殿の湯の前から、御射神社(浅間社)神宮寺の前を通り茶臼山の麓を抜け女鳥羽川を渡り五反田地籍に入ると五反田水と言われた女鳥羽川水系では特別な水路が流れています。この南下には七日市場の地名があり、川上には原の平野神社がある、この辺り一帯は宮の上遺跡で、平安時代の堅穴住居跡と多量の土器が出土しており土器作りに関係する人たちの村であったとされています。

この北奥深くには若宮八幡社、かつて井更(いぶか)八幡宮として仁徳天皇の時代(西暦300年代)に応神天皇・仁徳天皇を祀って創建された神社です。推古天皇の時代(500年代)に於加田(おかだ)神社と名を変え、その後岡田神社本宮と呼ばれるようになったといえます。

安曇に向かう道路は岡田神社南を抜け矢諸(やもろ)から塩倉に出て、此处で養老坂を下り梓川を渡り熊倉、穂高、千国道に出る道です。

この養老坂の峠は浅間の一号源泉、湯薬師(薬師堂)前から見ると、よく見透おすことが出来ます。この道の左右には歴史を繋ぐ地名や神社仏閣があり、国府や錦織駅も近い。

このように原地域は女鳥羽川の氾濫によって変貌しているものの古くから重要な場所でした。この時代には北信の勢力がこの地域にも及び、現在の中野市に本拠のあった笠原氏がこの地に来往したと考えられ、笠原姓が今も残っている。

吾妻鏡に「ここに平家の方人(かたうど)笠原平吾頼直という者あり、今日軍士を相具(あいぐ)して木曾をおそはんと擬す。木曾の方人村山七郎義直、並びに栗田寺別当大法師範覚等この事を聞き、当国市原に相逢て勝負を決す。両方合戦半ばにして日已に暮れる。然るに義直箭つきて頗る雌伏し、飛脚を木曾の陣につかわして事の由を告ぐ。仍って、木曾大軍を率ゐりて、競い到るの処、

頼直其の威勢に怖れて逃亡し、城四郎長茂に加わらんがために越後に赴くと云々」とある。

通説では、この戦いは治承4年9月7日に長野市市原付近であったとされている。しかし、私は治承四年九月七日市原の戦いは9月の話であり、七日市原は松本の浅間郷原下河原の七日市場であろうと思う。ここの五反田沖下七日市場であり、戦いの伝承はないが岡田と本郷の境であり、又原地区と水汲地区の境でもある。

他に松村弥治兵衛著「船山城史」に記されている「市原」がある。「治承4年9月7日木曾義仲が兵を起したので、天神山(美すゝ村)にいた平氏の一族・笠原平吾頼直は木曾を襲撃しようと八百を率いて下伊那に向かった。木曾軍はこれを聞いて、村山七郎と共に五百の軍勢を率いて市原(市田)に出て迎え戦った。笠原は一敗地に破れて、太田切城に引き揚げて残党を集めていた。義仲は敵の根城を突くべく伊那川の上流に廻って空木岳の北鞍部(木曾殿越えの名あり)の道なき陰崖を踏み分けて、大田切本谷に出て天神山城を襲って火を放った。頼直は何もすることができず、燃え上がる火を眺めているだけであった。」とあるが、「市田」を「市原」とするのはこじつけのように思えます。

また畠山次郎著『木曾義仲』では、城氏方の信濃への侵入経路は、関山越え、筑摩越え、千国越えの3ルートとしている。このうちの津帳宗親が率いる城氏軍がとったルート(越後から千国峠を越えて千国街道を松本に入り鹿教湯経由で依田城の攻略を目指す)に着目して、「麻績、会田の戦いがある、これは通説では、正確な日時と相手がわからないが、義仲挙兵の直後、市原の戦いと前後する治承4年9月とされている。この順序にはあまり意味がない、むしろ麻績・会田とも、松本から上田へ至る道筋にあることに注目すべきである。」「千国峠を越えて松本に至り、上田へ向かっていた城氏軍は、麻績・会田で撃破された。それは横田河原合戦の直後と推定される」とし、「のちには義仲軍従軍者として現れる安曇郡の仁科守弘(盛家)、筑摩郡の岡田親義らが横田河原の戦いに参加できなかったのは、宗親が率いる城氏軍が千国道を下り進軍してきたため」としています。

私も城氏軍は安曇野から養老坂を越えて侵攻し、笠原氏と井上氏を支援して七日市原の合戦になったと考えています。そして麻績や会田の戦いと七日市原の戦いも重ねてみる事が出来るのではないかと。麻績、会田の合戦も治承4年9月であり、7日は9月7日の7日なのではなく七日市原の七日だったのです。

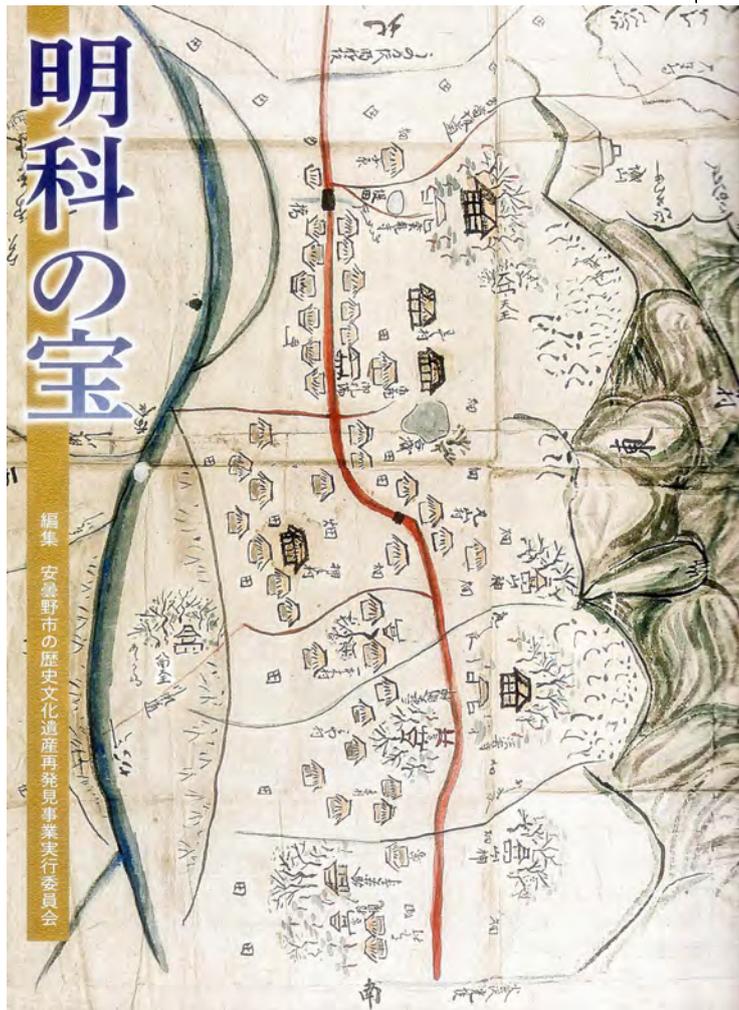
養老坂、岡田塩倉から安曇野の反対方向の浅間温泉方面を見てもらうと、七日市原も、浅間温泉も目の前に開けています。市原の合戦はまさにこの眼前で展開されたことになるのです。

魅惑の犀宮社 (明科)

吉川 幸男

犀宮社に八面大王がいる。なんでいるのか詳細不明だが、なぜか祀られている。

先日発刊された「明科の宝」。お持ちの方は扉絵の絵図を今すぐご確認ください。この絵図は元禄11年（1698）に作成された塔ノ原村絵図です。左下を見てください。八面大王って書いてあるでしょ。本来はこんな所に祀られていたのです。犀川のすぐ横（東岸）。ちなみに赤い太い道は川手道、当時の幹線道路（現在でいったら国道19号）、いったい誰が、何のために祀ったのか。



八面大王とはそもそも何なのか。よく安曇族と重ねられたり、関連付けられたりする伝説ですが、最終的には坂上田村麻呂に退治されたらしい。なんせ証拠が無いからわからない。よって何とでも言える。言ったもん勝ち。ただお話としては面白い。会員の皆様にはそれぞれの八面大王論をお持ちだと思いますので、ここでは突っ込んで書きません。へたに書くとすぐに批判される。めんどくさい。

（会報も八面大王特集号とか出したら面白いかも）

元禄時代の明科塔ノ原村では、八面大王というものが認識され、何らかの信仰の対象になっていたことは間違いない。

安曇野の有名な伝説トップ3のうち、①八面大王②泉小太郎、この二つは安曇族と重ねられたり関連付けて考えられることが多いのに、三郷の③デーラポッチャの伝説は、安曇族研究ではないがしろにされている。なんでかわかんが謎だ。伝説や昔話に実在のモデルがいたっていうなら、みんな平等に扱ってもらいたい。都合のいい事だけちやほやしてる。三郷の人はもっと怒るべきだ。安曇族って巨人族だったかもしれないのに。巨人伝説って世界レベルなのに。しかも全国的に巨人伝説には名前の頭にダイとかデイとか同じようなものがついている。世界的にはタイタンだ。もちろん巨人。星の名前にまでなっている。

ところで本稿のタイトル、テキトーにムード歌謡のようにしっちゃたけど、魅惑ってどんな意味か辞書を引くと「妖しい魅力で人の心を引きつけて、理性を失わせること」だって。まずい、負のオーラが出ている。そして犀宮社に妖しい魅力があるとは思えない。

明科の国道19号を通っていて気になること。犀宮社の本殿、国道を背負っている。走っている車を押んでいる形なので、交通安全の神様なのかと思っていたら、どうも違うらしい。国道よりもっと西側にある犀川を押んでいるそうなのだ。

簡単に言うと、川鎮めの神、治水の神、これが信仰の本線なのか。犀川が氾濫しないように頑張っている。全くありがたい。一応ご祭神を紹介すると、ヤマトタケル、タケミナカタ、オオヤマツミの3柱。

また、一説では穂高神社を向いているとの説もある。穂高神社の真東に位置して拝殿的な役割をしていたとの考えだ。

もう一つ小ネタ。お祭りの時に無地の赤いのぼりを立てる。これは珍しいそうだ。だいたい白布に墨書してある。しかしJR篠ノ井線の線路向こうに立っているのだからちっとも気づかない。もうちょっと目立つ場所にしてほしい。

赤いのぼりの意味は、海神族と関係が深く、海女は体を赤く色どって海に入るのだという。また、赤はふんどの赤で、のぼり並みに長くすることでサメに襲われるのを防ぐ意味があったという説もある。赤が弥生時代以来の聖なる色であったことは間違いないと思うが、赤いのぼりがいつの時代まで遡るかは不明。ただこれも話としては面白い。

犀宮社は明科宮本にあります。魅惑なところかもしれませんが。八面大王の祠、ぜひ一度ご覧ください。いや、お参りください。

参考文献：「明科町史」（1984年）
「明科の宝」（2020年）

安曇氏族のその後

金井 恂

安曇氏族は弥生時代から平安時代始めまでの約千年の長い歴史の中で、日本列島の広い範囲に分布して繁栄していた。神話では神武天皇の母と祖母は安曇氏族の祖神の娘であり、すると天皇家の外戚ということになる。古代においてはヤマト王権に近く、大きな勢力を持った氏族だった。持統天皇のころには古代から続く18氏族の一つとされていた。

しかし、安曇氏族は今ではすっかり衰退してしまい、安曇姓を名乗る人もわずかになってしまった。そして全国のゆかりの地においても、安曇という郡郷名は大半が消えて無くなってしまった。なぜそのように衰退してしまったのか。その事情は、今となっては史料不足のため不明であるが、その大略の事情を推測してみる。

1 大和朝廷における安曇連の衰退

『新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)』は平安時代はじめ(814年)に作成されたものであるが、それによると京都と畿内には、安曇宿禰(あづみのすくね)(安曇連(あづみむらじ))、海犬養(あまのいぬかい)、凡海連(おおしあまのむらじ)、八木造(やぎのみやつこ)、安曇犬養連(あづみいぬかいのむらじ)が居住していた。これらが安曇氏族である。

古墳時代応神天皇三年(385年)、大浜宿禰(安曇連の祖)は海人(あま)たちの騒動を鎮め、その功績により応神天皇から「海人(あま)の宰(みこともち)」（海人の統率者)に任命され、安曇連という氏姓(ウヂ)を与えられた。その後仁徳天皇の時代にかけて播磨国・摂津国で大きく繁栄していた。

ところが大浜宿禰の子供の阿曇連浜子は、住吉仲皇子の皇太子暗殺クーデターに加担し、敗北してしまう。その結果、死罪は免除されたものの大きなダメージをこうむった。しかし安曇連は滅亡するのではなく、この地域で長い期間雌伏していた。

そして飛鳥時代、推古天皇の後期(623年ころ)に復活し、朝廷に参内するようになった。その後、孝徳・天智・天武・持統天皇の時代に朝廷で文官として大いに活躍していた。この時代は安曇氏族の繁栄期であった。

しかし大化改新(645年)の国家支配制度の変革を契機として、それ以降では衰退傾向がはじまった。改新の詔(みことのり)には皇族や豪族たちが私有する土地および私有する民を廃止せよという条項がある。公地公民制といわれるものである。これを実施するためには正確な戸籍簿や土地台帳等が必要であり、実施は大宝律令制定の701年のころまで延びたようである。

その代償として豪族たちには位階と官職が与えられ、それに応じて位田・位封、職田・職封、位禄、季禄という職給が与えられた。職給の内容は、五位以上の貴族た

ちに厚く、それ以下の官人たちには薄いものだった。豪族たちにとって、位階と官職を得ることにより地位と名誉は確かになったものの、位階の低い者は経済的には大変に貧弱なものだった。

律令制度が整った段階では、安曇宿禰の位階は通常は6位以下であり、五位に昇進することは少なかった。それ故に経済的には苦しかったと思われる。以前のころの威勢は無くなり、氏族としてのまとまりも無くなってしまったと思われる。なかには国司に任命されて赴任し、それなりに財を蓄えた者もいたと思われるが、それも一時期のことであった。つまり安曇宿禰の威勢はすっかり衰えてしまったと考えられる。

そのような状況のなかで、安曇宿禰継成(つぐなり)は内膳(うちのかしわで)職(天皇の食膳奉仕の職)において、安曇氏が優先されていないことに不満を募らせた。そして桓武天皇のとき(791年)に膳職の職務を放棄するという罪を犯し、佐渡島へ流刑となった。さらに安曇宿禰大丘は桓武天皇のとき(799年)、世襲としてきた内膳職の奉膳(ぶうぜん)(長官職)から外されてしまった。これ以降では従五位下安曇宿禰広吉を安房守任じるという記録があるだけで、それ以外は見つからない。朝廷においてはすっかり没落してしまったようである。

2 大和朝廷における他の安曇氏族

海犬養氏は天武天皇の時に宿禰という姓(かばね)を授与されていたが、平安時代では無姓である。聖武天皇紀(740年条)によると、海犬養五百依(いおき)は橘左大臣家の家令になっていたと記されている。すると、海犬養氏は奈良時代中頃には、世襲職としてきた宮城門・海犬養門の警備職から没落し、橘左大臣家に従属していたのである。なお徳島市八多町には式内社速雨(はやさめ)神社があり、由緒書の中で、この地は「古代豪族海(あま)の犬飼(いぬかい)氏」の領地だったと記されている。またこの近くに犬飼地籍が現在も残っていることから、海犬養氏はこの地に土着したと思われる。しかし現在ではその消息は消えてしまった。

凡海氏は連姓となっている。これも宿禰姓から降格されている。海犬養氏と同様に衰退していたと思われる。凡海連は丹後国加佐郡凡海郷(舞鶴市)に居住していたと考えられるが、その地で海部(あまべ)の直(あた)氏との争いが生じ、それに敗れて衰退したと思われる。室町時代に建福寺が、凡海郷の寺所から納められる年貢が少ないとして凡海郷代官を訴えたという文書がある。それ以降では凡海郷地名および凡海連の消息は絶えてしまった。

八木造は平安京に居住と記されているが、本拠地は河内国和泉郡八木郷と言われている。現在の岸和田市の中井町周辺である。八木造は八木郷にしっかりと根を下ろし、住

民たちを統率していたと思われる。そして他の氏族との婚姻関係をいくつもつくり繁栄していた。八木郷は全国に多数分布しており、また八木姓の人々が現在も多数存在していることは、このことを示している。八木造は大きな勢力を保ちながら現在まで継続している。

安曇犬養連は平安時代はじめには摂津国で朝廷の倉の警備にあたっていたと思われる。一方、『古代氏族系譜集成』によると、大浜宿禰の5世孫は信濃国穂高神社を奉斎した（6世紀ころと思われる）とのことである。すると安曇犬養連は平安時代のはじめころには、朝廷貴族としては没落し、信濃国安曇郡へ移住していたと思われる。

3 ゆかりの地における安曇氏族のその後

ゆかりの地における安曇氏族は弥生時代から飛鳥時代のころには、安曇郷を設立し首長として定着していた。大化改新での私有地放棄と私有民（部曲（かきべ）・部民（べみん））解放の制度は当初は畿内ではじまったが、その後全国にも広がり、やがてゆかりの地でも大きな変革をもたらした。

安曇部（あづみべ）（安曇氏族の部民）は解放され自由民となり、口分田（くぶんでん）を支給されそして自立していった。中には墾田したり買収したりして所有する土地を増やし、地域の有力者となる者も誕生した。例えば信濃国安曇郡では安曇部百鳥についての記録が残っている。この人物は安曇部であったが、奈良時代中頃（764年）には従七位上という位階を授与され、主帳という郡の役人に昇進していた。また平安時代前期（866年）、阿波国名方郡に安曇部栗麻呂がおり、彼は賀陽親王の家令であり、正六位上という官位を持っていたところ、安曇宿禰を下賜されたという記録がある。このころ安曇部は安曇氏族から離れ、自立したり、あらたな主家を探したりしていた。このような部民たちの自立は安曇部に限ったことではなく、全国的にみられる傾向であった。

奈良時代では郡・郷の古代氏族による支配形態が解体し、中央集権的に再編されていった時代である。都は表面的には華やかだったが民衆の生活は悲惨だったようである。使役として都へ出たまま、故郷へ戻る費用がなくて浮浪民となる者が多く、また郷里でも租税負担に耐えられずに逃げ出す農民が多くいたようである。

一方豪族氏族にとっては、私有地と私有民がなくなったのであるが、郡司（郡・郷の役人）に任用され、従来と同様に地域の実質的支配者として活躍していた。そのためとくに不満はなかったと思われる。

その後、9世紀ころから、朝廷では税収不足が大きな問題となった。そこで徴税強化のために国司の権限を強化する方向に制度改革が行われていった。これに伴い国司の権限が増し、郡司選定における国司の役割も強まった。一方、郡司の権限はどんどん奪われていった。国司側では急速に勢力を拡大し、郡司側では急速に衰退していった。そして郡司層（地域の豪族層）は国の制度変革

に適応し発展するものと、適応できずに没落していくものに分かれていった。適応できたものは、その後新興の在地領主、地方武士へと発展していった。安曇氏族も同様に、没落するものと勢力拡大し繁栄するものに分かれていった。

1) 筑前国糟屋郡安曇郷地域

筑前国糟屋郡安曇郷は安曇氏族発祥の地とされ、現在の福岡市東区・新宮町周辺と考えられている。この地域ではさまざまな歴史が展開された。弥生時代には中国の前漢および後漢との交流があり、また人口増大に伴い住民たちは大挙して日本列島の東方へ進出していった。その後磐井の乱（527～528年）が起こり、糟屋郡地域は糟屋屯倉としてヤマト大王へ賠償として献上された。この事件で、安曇氏族の主だったものは安曇郷を追われ周辺地域、志賀島・大川市地域へ追放されたと思われる。

その後那津官家（なのつのみやけ）が設立され、海犬養連が設立された。そして白村江の戦い（663年）が起こり、百済と日本の連合軍は大敗した。その結果那津官家は大宰府へ撤収し、海犬養連は大和国へ移住していった。

こうした歴史の中でこの地域の安曇氏族は衰退の一端をたどることになったと思われる。氏神社である志賀海神社が安曇郷ではなくて志珂郷の志賀島にあることは、安曇氏族の衰退状況を反映しているように思える。平安時代以降では安曇郷という地名も消えてしまい、安曇姓を名乗る人も少ない。

2) 播磨国・摂津国地域

安曇連は応神天皇・仁徳天皇の時には播磨国明石郡垂水郷、摂津国難波地域において繁栄し、そして雌伏したのであるが、その後飛鳥時代に入って復活した。そして播磨国揖保郡石海（いわみ）郷・浦上（うらかみ）郷地域で水田を開拓し、定着していた。しかしその後播磨国における安曇連の消息は少なく、『朝野群載（ちょうやぐんさい）』（平安時代後期の書）という書にわずかに記載されているだけである。それによると平安時代後期（1015年）に赤穂郡有年荘（うねのしょう）に安曇を名乗る寄人（よりうど）が7人いたと記されている。寄人とは何かははっきりしないが、石海郷・浦上郷等から逃げ出し有年荘へ移りそこで雑役などをしてきた人のようである。この人々は石海郷・浦上郷で百姓として定住できず、没落し、この地から逃散したと思われる。

3) 美濃国厚見郡厚見郷（岐阜市周辺）、三河国渥美郡渥美郷（豊橋市・田原市周辺）

濃尾平野へ進出した安曇氏族は、尾張氏族等に圧迫され美濃と三河地域に移動して定着したと考えられる。そして厚見（あつみ）氏および渥美（あつみ）氏を名乗り、郡・郷を設立し、地域に密着し開拓に励んだと思われる。中央から遠く離れ、土豪として発展し繁栄してきた。現在においても厚見姓、渥美姓を名乗る人々は多数おり活躍している。

⇒8頁に続く

(7頁から続く)

4) 信濃国安曇郡前科郷・八原郷・高家郷(安曇野市周辺地域)

安曇郡には古墳時代後期の群集墳がある。小規模な円墳群であり、数は百基以上あると言われている。それらの大きさはみな同程度である。このことは、当時の安曇郡地域では突出した勢力をもつ首長・豪族はおらず、住民たちは平準化されていたことを示している。当時の安曇郡の農業生産力は低く、そのため安曇氏族といえども富の蓄積は容易でなかったと思われる。それでも奈良時代中頃には、部民から解放された自由民たちはそれぞれに開拓努力を続け、富を蓄積し有力者となる者が出てきた。その例が安曇部百鳥である。

安曇氏族は開拓や農作業から離れ、穂高神社の宮司として地域の精神的支柱として尊崇される立場になっていっ

たのではないだろうか。その後中世では相次ぐ戦乱に見舞われ、安曇氏族は分散してしまっと思われる。安曇部は土着民として地域に根付いていたと思われるが、いまではその消息も絶えてしまった。現在では安曇姓を名乗る人も見当たらない。

5) その他のゆかりの地

ゆかりの地としてこの他に伯耆国会見郡安曇郷(米子市上安曇・下安曇地域)、隠岐国海部郡、丹後国加佐郡凡海郷(舞鶴市地域)、近江国伊香郡安曇郷・高島郡(長浜市高月町・高島市安曇川町地域)、相模国足下(あしのしも)郡土肥(どひ)郷(湯河原町・真鶴町地域)がある。これらの地域における安曇氏族の経歴は、それぞれに多少の差異はあるが似たようなものである。いまでは安曇氏族は消えてしまった。

(金井 恂)

2020年度 安曇野歴史サロン 好評開催中

開催月日	テ ー マ	講 師	会 場
7月18日(土)	信州の考古学入門(1) 弥生時代への誘い	原 明 芳 氏	豊科きぼう
8月29日(土)	穂 高 神 社 物 語	等々力良勝氏	明科公民館
9月26日(土)	日本史のここが変わった!(2)	池田 義光 氏	明科公民館
10月31日(土)	安曇平の戦国時代入門(1) 武田氏の侵攻と安曇郡の領主たち	逸見 大悟 氏	穂高みらい
11月21日(土)	信州の考古学入門(2) 古墳時代への誘い	原 明 芳 氏	明科公民館
12月12日(土)	安曇平の戦国時代入門(2) 戦国時代を生きた人々	逸見 大悟 氏	明科公民館
1月23日(土)	信州の考古学入門(3) 奈良時代から続く信濃の村	原 明 芳 氏	明科公民館
2月20日(土)	安曇平の戦国時代入門(3) 武田氏滅亡から天正壬午の乱へ	逸見 大悟 氏	明科公民館

*3月度サロンは「安曇野の考古学・長野県の考古学」のテーマで計画中です。



新型コロナウイルス感染防止のため、3月から休止していた歴史サロンを7月から再開しました。今後の感染拡大状況によっては中止したり、予定が変更になる場合がありますので、予めご了承ください。

問合せ 川崎 TEL090-5779-5058

編 集 後 記

編集委員長代行 松尾 宏

◆今回、編集委員長の都合により、委員長代行の私が編集後記を書くことになりました。会報「安曇人」は10年前の創刊号から、この17号の発行となりました。その間多くの皆様から歴史分析・意見や紀行文等をいただき感謝いたします。

◆「安曇誕生の系譜を探る会」も発足して12周年を迎えました。我々が住んでいる安曇はどのようにして誕生したのか、また我々の祖先はどこから来たのか、歴史の夢やロマンを語り合おうと、会を作り、勉強会・福岡東区の志賀島や安曇(阿曇)ゆかりの地との交流・地域貢献事業として市内の古墳の整備・毎月「安曇野歴史サロン」の開催・視察研修旅行などを行ってきました。

しかし、今年の2月ごろから始まった、新型コロナの世界的流行の為、会の活動にも大きな影響が出ております。

会員の年次総会、役員会や勉強会・視察研修などが行えません。その中でも、細心注意をして感染対策をしながら「安曇野歴史サロン」を開催しているところです。このサロンには毎回60~70名の皆さんの参加があり、歴史への関心の高さを感じています。感染の状況を考慮しながら続けていきます。

◆今年は5年に一度の“国勢調査”の年です。この調査を始めて今年で100年だそうです。今回私も調査員として参加していますが、一部にお名前や世帯人数などを伺うにも、個人情報保護法的な対応に配慮が必要と感じました。この調査結果は将来の歴史資料として残っていくものです。正しい数字を残すために協力を、そして調査員にも少しのやさしさをいただけると、不審者扱いから救われます。